

岡山市立オリエント美術館

幼いころから、私の将来の夢はずっと学芸員でした。そのため、中学生の時私は岡山市立オリエント美術館を職場体験の場として選びました。それ以前より様々な博物館を訪れていましたが、「館内の学芸員として働く」というこの体験から、博物館の新たな側面を知ることができました。

一つは学芸員の仕事についてです。以前学芸員の仕事は展示の企画、資料の収集・保存や、研究等であると私は考えていました。しかしこの職場体験で、学芸員にはそれ以外で取り組んでいる仕事が多数あることを知りました。例えば、ある学芸員の方は小学生社会の出前授業を行っていました。またある人は、友の会でのワークショップの企画や実施をしていました。他にも、展覧会の広告作りや、それを貼りに行く仕事などを目にしました。このような仕事は、博物館が可能な限り多くの人との関りを作るために重要なのだと、当時の主任学芸員の方が教えて下さりました。

次は博物館の構成について。この職場体験を通して、館内で多くの指定管理者の方が働いていることに気づきました。入口付近では、受付係の人がいつも笑顔で利用者の方々へ丁寧な案内、対応をしていました。館内から館外の隅から隅までが、清掃サービスの人によって、清潔かつ落ち着いた空間が毎日保たれていました。この様子を見て、指定管理者の人たちと学芸員の連携した体制が、博物館の構成に必要であることを知ることができました。

これらのことから、学芸員の多岐にわたる仕事や、館内、館外での様々な人との関りや連携が博物館にとって重要な支えであることを学びました。今後学芸員として働くことになったなら、この意識を忘れずに仕事をしたいと思います。このように、貴重な体験と学びの機会を与えてくれた岡山市立オリエント美術館を私の最も「思い出のあるミュージアム」としてここに紹介します。

(文学部 芸術学・美術史分野 片山由奈)

岡山シティミュージアム

私が岡山シティミュージアムを初めて知ったのは、中学二年生のころ、まだこの博物館の名称が「岡山デジタルミュージアム」であった時のことです。私は友人二人とともに、岡山シティミュージアムに職場体験に行くことになりました。職場体験の行先は他にもいろいろと選ぶことができましたが、私は博物館に対する単純な興味から、博物館を行先を選びました。

「職員以外立ち入り禁止」のエリアに入ったのはもちろん初めての経験でした。見るものすべてが新鮮で、初日はずっと緊張していたのをよく覚えています。私は職場体験チームのリーダーで、あらかじめ確認の電話をしていたにもかかわらず、当日待ち合わせ場所がわからず、担当の方に迷惑をかけてしまったのは、今となっても苦い思い出です。

博物館では、たくさんの貴重な体験をさせていただきました。学芸員という職業を知らなかった私にとっては驚きの連続でした。一番驚いたのは、学芸員がやるべきことの多様さです。展示の企画や広告の作成、データベースの管理など、三日間の職場体

験の中で、三日とも異なる作業を紹介してくださいました。実際に体験したのは、簡単なデータの作成と、展示室の監視です。当時は「インカ帝国のルーツ 黄金の都シカン展」をやっていて、私たち三人は、ミイラの前で椅子に座って一人二時間監視を行いました。

職場体験の最終日に、改めて展示を見て回りました。展示のためになされているたくさんの作業を見て、経験した後だったので、感動もひとしおでした。

私が学芸員を目指しているのはその時からです。学芸員という仕事の重要さに触れ、憧れを抱くようになりまし。また、文化財について勉強すればするほど、将来文化財に関わる仕事がしたいと思うようになっていったのも理由の一つです。たった三日間の職場体験でしたが、学芸員の皆さんに優しくしていただいたのは、一生忘れることのない大切な思い出です。これからも勉強を頑張って、夢をかなえたいです。

(文学部 歴史学・考古学分野 額田千夏)



学芸員課程 Newsletter

Newsletter from Course for Prospective Museum Workers, Faculty of Letters, Okayama University

編集・発行: 岡山大学文学部学芸員課程 (編集 光本 順)
発行日: 2018年3月23日
文学部学芸員課程 Web Site
http://www.okayama-u.ac.jp/user/pmww

contents

特集 第5回学芸員課程企画展
光本 順…………… 1
博物館実習生による企画展報告
三井絵莉子・山岡隆太・田中陽子
・泉 岳志・大島友子…………… 2・3
思い出のミュージアム
片山由奈…………… 4
額田千夏…………… 4

人文系博物館実習の一環で、第5回文学部学芸員課程企画展「うつす・むすぶ」を2017年12月7日から19日に実施しました。会場は岡山大学附属図書館・中央図書館本館2階の学修スペース「サルトフロresta」です。お借りした2台の展示ケースに、「鏡の世界」「日本のお守りコレクション」という2つの展示を行いました。展示の企画・運営はすべて実習生が行いました。さらに今年度は、見学者の方が参加できる何かを展示にプラスすることにしました。展示にあたってお世話になった岡山大学附属図書館の皆様へ感謝申し上げます。

また本号では、学芸員課程の授業を履修中の学生が中学生の頃、職場体験の場としてミュージアムで体験した話を掲載しました。職場体験を通じて博物館や学芸員にいつそう興味を抱き、大学での学びにつながっているようです。博物館における地道な教育活動の効果の一端を垣間見るようです。こうした博物館体験のストーリーを発信することも、本ニュースレターのささやかな役割と考えます。
(文学部准教授 光本 順)



展示風景

特集

第五回文学部学芸員課程企画展

博物館実習生による企画展報告

「鏡の世界」展

「鏡の世界」展は、「鏡」にまつわる言葉を実物の鏡を用いて表し、鏡に寄せられた人々の思いを表現した展示です。言葉と物とを結びつけた所が特徴です。鏡は古くから何かの象徴として、また何らかの意味を持つものとして捉えられてきました。鏡と人々の生活の関係や人々の考え方、鏡を再発見する契機を提供したいと考え、企画しました。身の回りの鏡たち、「鏡花水月」、「人こそ人の鏡」、「明鏡も裏を照らさず」、「破鏡不照」という構成です。各々、眼鏡と万華鏡、鏡と花、合わせ鏡、鏡と宝箱、割れた鏡を展示しました。キャプションには言葉の意味や、来場者の方に呼びかけるような文章を添えました。この展示によって、鏡や鏡に関する言葉に、改めて目を向けるきっかけを作ることができたと考えています。

(文学部 哲学芸術学専修コース 三井絵莉子)



がなされた他、動物を模したおみくじも配置されました。さらに、壁面に設置したパネルでは「ピックアップ寺社紹介」と題して、注目すべき寺社について紹介するという試みも行われました。これらの工夫によって、寺社やお守りに興味があった人もなかった人も、楽しめる展示を実施できたのではないかと思います。

(文学部 歴史文化学専修コース 山岡隆太)

イベント

展示関連イベントとして、「あなたの御守り」というコーナーを設けました。これは、壁に掛けた御守り形のパネルに、来場者の方が願いごとを書いた付箋を貼っていくという企画です。4色の付箋を用意し、桃色は恋愛、青色は勉学、緑色は健康、黄色はその他と、色に応じて願いごとを分けました。この企画で、来場者の方はただ展示を見るだけでなく、参加することができます。それによって、来場者の方は展示全体をより楽しんで頂けたように思います。参加して下さいました皆様、ありがとうございました。

(三井絵莉子)



「日本のお守りコレクション」展



2つ目の企画展示は、日本各地の寺社から収集したお守りを展示する「日本のお守りコレクション」展です。美しいお守りを通して、日本の寺社に関心を持ってもらおうという趣旨から出発しました。今回は、西日本を中心に約40のお守りが展示されました。収集場所をプロットした地図を展示ケース内に設置することで、視覚効果を高める工夫

展示設営の様子

「鏡の世界」では、映る角度を考えながら展示資料を置きました。特に「鏡花水月」は、その世界観を効果的に表現するために、来場者の方に足形のマークで止まってもらい、上から覗くと花が見えるように設営しました。「日本のお守りコレクション」では、地図とお守りを交互に見比べ、地方ごとの違いや特徴を楽しめるようにしました。パネルは傾きがなく、高さを等しくして、全体的にバランスが良くなるように並べることを意識しました。

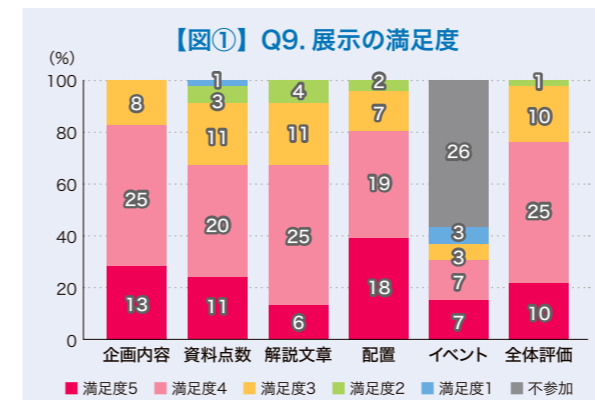
(文学部 言語文化学専修コース 田中陽子)



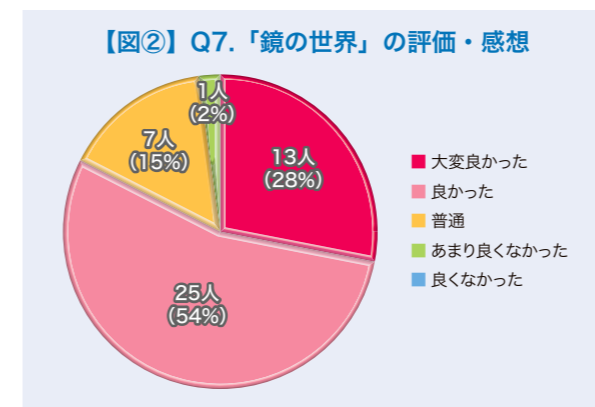
アンケート結果・分析

当企画展では来場者の方を対象に、アンケートに協力して頂きました。来場者層は学内ということもあり、10代、20代の学生に限定されています。来場者・回答者共に、全部で46人です。このうち44人が、「博物館展示論」受講者で、残りは授業以外で来た人です。

アンケートは10の質問から成り、それぞれQ1.年齢 Q2.出身地 Q3.職業 Q4.サルトフロrestaの利用頻度 Q5.展示情報の入手方法 Q6.一緒に来た人 Q7.「鏡の世界」の評価・感想 Q8.「日本のお守りコレクション」の評価・感想 Q9.展示の満足度 Q10.今後のイベント参加の是非、その他の意見・感想です。Q9は、内容・資料点数・解説・配置・イベント・全体を通しての満足度を、1～5段階で評価をお願いしました。満足度4～5の割合が高いことから、全体として比較的高い割合で満足して頂けたと思います(図①参照、数値は人数)。

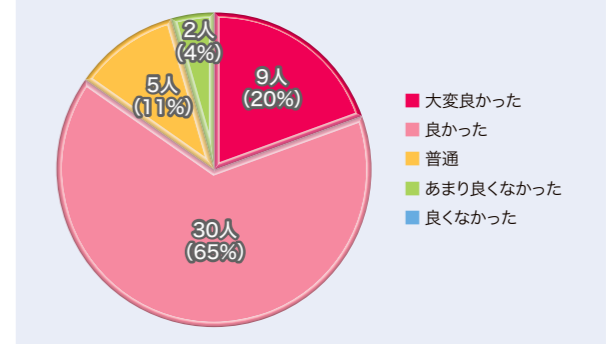


「鏡の世界」では諺・四字熟語に注目し、本物の鏡を展示するという独自のアプローチに評価を頂きました。また、「流行語が取り入れられていて面白い」、「哲学的」、「普段使っているものに奥深さが感じられた」、「鏡花水月が印象的」といった感想もあったことから、企画の趣旨である「鏡の良さを再発見する契機を提供する」は達成できたと思います(評価人数、割合は図②参照)。



「日本のお守りコレクション」では、各地のお守りを集めた展示数の多さやその視覚的効果から、バラエティーに富んだ展示に評価を頂きました。また、「神社に行ってみたくなる」、「神聖な雰囲気があった」、「解説が分かりやすく、シンプル」、「同じ結び目のお守りがあって面白い」という感想も見られました。よって、日本各地のお守りに対して興味を持ってもらうという企画は成功したと思います(評価人数、割合は図③参照)。

【図③】Q8.「日本のお守りコレクション」の評価・感想



どちらも想像力を刺激し、印象的な展示であったと考えられます。今後は、より幅広い年代の方に来て頂けるように、イベント・展示共に、どのように広報するか課題だといえるでしょう。最後になりましたが、来場して下さいました皆様、アンケートに答えて下さった皆様にご心より感謝申し上げます。

(本文:文学部 哲学芸術学専修コース 泉 岳志 図作成:文学部 行動科学専修コース 大島友子)

まとめ

今回の企画展は、展示の立案から設営、アンケートの実施、イベントの実施、撤収まで学生主体で行いました。展示企画の際は、展示を実施する意義やモノ力をどう生かすかということを考え、案を具体化していきました。案が2つに絞り込まれ、企画展示で実施決定後は、学生間で役割を分担し、チラシ作りやイベント立案、解説資料の印刷等を含めて協働し、展示の実現を目指しました。

実習では、展示の一連の流れを企画側として経験することで、今まで学芸員課程で培った知識に磨きをかけると共に、実践の中でしか得られない知見を得ることができました。今後は、これらの知見を広く社会に還元できるように努力していこうと思います。(山岡隆太)